



失恋日和



葉月羽音

夕焼け空、放課後の教室、静まり返った空気、黙り込んだ男女、二人。何かが始まる様な、何かが終わる様な、曖昧な境界線が二人の間に引かれている。緊張から少女の心臓がありえないほどの音を立て、いつも以上の稼働率を叩き出す。両手をギュッと握りしめ、その音が少年に伝わらないようにと願う様に、聞こえないようにと祈る様に、瞼を閉ざして俯いた。

少女は少年に恋をしていた。同じクラスで、隣の席になって、落とした消しゴムを拾って少年に渡した時から、会話を幾つか重ねて友人となった。

少女にとって少年は、本当に友人だった。いつからそれが変わったのか、切っ掛けは何処に転がっていたのか、考えなくても覚えている。寧ろ、気付かなかっただけなのだ。

授業中に落とされた真っ白な消しゴム。足元に転がってきたそれを拾い上げ、落とし主であろう隣の席の少年に視線を向ければ申し訳なさそうな表情を浮かべて手をこちらへと向けていた。その手の平の上に少女は小さく笑って消しゴムを乗せた。

「もう落さないようにね。」

ちょっとした悪戯心。些細なやり取りの一環の様なものだ。授業中だったから声は抑えめに、けれど、音程は軽やかに。言葉を交わし合うのはこれが初めてだが、同じクラスになって数ヶ月は過ぎているのだ。これくらいは大丈夫だろう……多分、だなんて意外と小心者な考えを覗かせる少女に対して少年は瞬きを一つ、二つ。ふわり、緩んだ目尻が柔らかな弧を描いた。

「ありがとう。気を付けるよ。」

少女と同じように小さな声で返してくれた少年の言葉がじんわりと少女の心に広がる。暖かで優しい、感謝の言葉。些細な言葉の一つだけれど、少女にとって少年が紡いだ感謝の言葉はとても大切な言葉の一つとなった。

きっとそれが最初のきっかけ。そこから少女は少年をよく見るようになった。男の子としては大人しい部類に入る少年だが、好きなことや嵌っている事に対しては感情をあらわにするタイプ。同じクラスの友人達と交わす会話の中ではとても生き生きしている。

誰かが困っていたりすると率先して手を差し伸べる少年は、都合よく利用されてしまっているんじゃないかとやきもきする事もあった。そして正直にそれを不満という形で少年に零した時もあったけれど、少年は笑って首を横に振るばかり。

「そんな風に見られる事はよくあるけど、でも実際はそうじゃないよ。俺がやりたくてやってるだけ。だから大丈夫だよ。……でも、ありがとう。心配してくれて。」

柔らかな微笑みと、静かな物言いは少年の気持ちを素直に少女の元へと届けてくれる。不満から

ささくっていた心を癒してくれるのだ。滲むように広がる喜びは、溢れだす愛しさはきっと、少女が少年に恋をしたから。でも、本当はあの消しゴムを渡した瞬間の「ありがとう。」の一言から、少女は少年に想いを寄せていたのだ。淡く芽吹いた恋の花。糸し糸しと言う心と書いて「戀（こい）」と読む、奥床しい愛のままに。

少しずつ少しずつ二人の距離を縮めて。けれど後もう一步を踏み出すには近すぎたその距離に少女は焦って。時には上手くいかないもどかしさから少年を避けてしまうこともあった。それでも少年は少女を責めるでもなく、置いていくわけでもなく、ずっと傍にいてくれた。傷つくようなことも言ったし、実際に傷つけもしただろう。にも拘わらず少女の傍に黙っていてくれた少年に、溢れだした想いは突如として開花した。

「私、貴方の事が、好きなの。」

誰もいなくなった放課後の教室。帰ろうと誘われてもまだもう少しだけ、と強請って、強請って、強請って一一溜めこんだ勇気を振り絞って、声にした一言。少女の想い。その矛先を向けられた少年は一瞬驚いたように眼を見開くけれど、すぐに真剣な眼差しで、真っ直ぐに少女を見つめた。

少女は時が止まる様な感覚に息を呑みこんで、結論を待つ。どんな答えが少年の口から飛び出すのか、心のどこかで結末を悟りながらも見て見ぬフリして僅かな期待に望みを掛けた。少年は、ゆっくりと口を開く。

「ありがとう。」

零れた感謝の言葉に少女はハッと顔を上げ、少年を見つめる。少年はどこか照れくさそうな恥じらいを見せつつも、瞳はその先に続く言葉を思っか、じわりと滲みだす翳り。少女の中に生まれていた僅かな期待はこの瞬間に砕けて消えた。

「そんな風に想ってくれて嬉しい、けど……俺は君の事を友人にしか見れないから、だから、ごめん。」

少年の口から語られる最終結論。曖昧な境界線は終わりを迎える形で消え去った。少女はグッと唇を噛み締めて、そして、笑う。不格好な笑みだとは承知している。それでも、笑った。

少年の気持ちが自分が持つ気持ちと全く逆方向に向いていることなんて、最初から解っていたのだ。恋をしていると自覚したその瞬間から、いや、その前からずっと少年の視線を追いかけていた。少年が見つめる視線の先に誰がいるのかなんて、その時点でとっくに解りきっている。それでも諦めるなんて事出来なくて。

振り向いてもらう為にもがいて、足搔いて、苦しんで。いっそこんな想い、捨ててしまうことが

出来たらと何度も思った。嫉妬心を抱いて醜い自分を晒すくらいなら少年を好きになんてなりたくなかった。だけど、少女は捨てられなかった。少年から貰った「ありがとう」の気持ちに浸り過ぎて、溺れてしまった。

少女は少年に恋をした。その事実は、変わらない。なら、ほんの少しの期待を信じて踏み出した一歩は、間違いではない。そう信じてる。

揺らぐ両眼に広がる世界は歪んで見える。瞬きしたら解消されるだろうそれを必死に堪えて少女は震える唇を開いた。

「そ、っか。結果、解ってたけど、やっぱり駄目か。」

「……ごめ、」

「謝らないで。」

「え、」

沈痛な面持ちで謝罪しようとした少年の言葉を遮って放った一言。

「謝られたら、私の気持ち否定されてるようで、辛いから。」

「……………」

気を抜けばしゃくりあげそうな言葉を喉に引っ掛けながらもちゃんと一言一句音にしていく。少年は少女の言葉に出かかった言葉を無理矢理呑み込んだ。

否定したいわけじゃない。少女の気持ちが嬉しかったのは本当だから。ただ、自分が返せる気持ちが少女の望むような気持ではなかった。それが申し訳なくて謝罪が口を吐いて出そうになるのだけど、少女の言うとおりに、謝ると言うことは否定にも繋がってしまうのかもしれない。

もどかしい気持ちで一杯になる。こういう時、どんな言葉を掛けてあげればいいのか分からない。気持ちの矛先は違えど、少年にとって少女は大事な人なのだ。消しゴムを落とした時、すぐに気付いて拾ってくれた彼女の優しさと初めての言葉。そこから今まで二人一緒に辿ってきた日々のやり取り。思い返せば短い期間の中で多くの時間を一緒に過ごしてきた。初めての距離から近づいた分だけの想いが確かにあるのに――少年は少女に好きだ、と言えないのだ。言えるのは、大切な友人として好きだと言うことだけ。

嘘でもいいから同じ気持ちを返せたら、なんて、一瞬でも考えた少年だが、そんな風に思った自分を殴り飛ばしたい。それは少女を喜ばせるどころかより一層傷つけるだけだ。結局傷つける結果になると言うのなら、嘘は吐かずに本音で語った方がいい。それが互いの為になるのだと言い訳めいた呟きを胸の内に落とす。

少年は自分の所為で傷つけた時に、何も言えない無力さを噛み締めた。そんな少年を揺れる歪んだ視界におさめながらも少女は明るく言葉を締めくくった。

「ありがとう、私の気持ち、聞いてくれて。ちゃんと振ってくれて。真剣に向き合ってくれて、

嬉しかったよ。」

「そんな、俺は……。」

「あー、私、今日は一人で帰るね。あと、こんな告白したけど、避けたりしないでくれると嬉しい、かな。そりゃ、すぐには無理だけど、だけど、貴方と友人で居られなくなるっていうのも、苦しいから……なんて、ごめんね。我儘で。」

「いや、俺も……友人で居られる方がいいから、だから――避けなくて、ずっと待ってる。」

「……うん、うん、ありがとう、本当に、ありがとう。」

堪え切れずに落ちた瞼。零れる涙、一滴、二滴。筋を作って痕になる前にと拭いとった少女は改めて笑顔を浮かべた。無理のない、少女らしいそれに少年は僅かに胸を痛めながらも言葉なんて出てくる筈も無く。

「それじゃ、私もう行くね。付き合ってくれて、ありがとう。」

さようなら、声無き声を聞いた気がして少年は咄嗟に喉の奥から言葉を引きずり出した。

「こっちこそ、好きになってくれてありがとう！！」

その場にはあまり相応しくない感謝の言葉。どうしてこの言葉が今口から零れ出たのか。選択を間違えてないだろうか。少年は張り上げた声を咄嗟に後悔したけれど、次の瞬間それはいともあっさりと消え去ってしまう。少女が嬉しそうに笑ってくれたのだ。笑って「またね。」と手を振って教室から消えていく。

間違えたと思った選択は間違いじゃなかった。その事に安堵して、少年も足を動かした。いつまでも此処に居られない。先生に見つかってしまえば嫌味と一緒に追い出されてしまうだろう。それだけは避けたいのだ。

手早く荷物を纏めて持ったなら、迷うことなく扉へと一直線。けれど、その向こうへと足を踏み出す一歩手前で振り返る。先程まで少女と共に立っていた場所へと視線を移す。誰もいないその空間に、少年はもう一度「ありがとう。」と呟いて、改めて前へと進んでいく。

音を立ててしまった教室の扉。消えた少女と少年を見送る夕焼け空は、ゆっくりと夜の帳を落としていった。